

生書との阿圖

上之巻

有吉佐和

出雲の阿国

上之卷

有吉佐和子

中央公論社

出雲の阿国へ上之巻

©一九六九年
検印廃止

定価五五〇円

昭和四十四年九月五日印刷

昭和四十四年九月十五日発行

著者 有吉佐和子

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一
電話（表）五九二（代）

出雲の阿国

上之卷

題字
花崎采琰
見返繪
中尾進

第一章

大蛇が動いておるげな、と人々は首をすくめて囁きあっていた。鳥上の滝を落ちてから幾百幾十の山や谷を越え、ずりずりと這い出してきた大蛇が、洪水のときには八岐に裂けて暴れまわり、川下の村邑を荒らし尽す。そのときの水勢で、大蛇は河口の位置を大きく変えることがあった。だが、そうでなくても、静かに流れているときでさえ、大蛇は動いているらしい、と人々は噂しあっているのであった。

斐伊川のことである。

出雲の山岳地帯から、うねうねと流れて出雲平野を大きく二分し、出雲湾の中央へ注ぎこむ斐伊川が、少しづつ西から東へ覽り寄っているのは、杵築と呼ばれるその地方に住む人々にとって無口な妖怪の動きを見守るように不気味なものであった。しかも、その原因は分っている。山の中には鑑があるからだ。

鑑とは、鉄鉄採取を業とする人々の集団とその作業をいう。山中の風化した御影石（花崗岩）を突き崩して上流の斐伊川に投げ入れると、激しい流れはそれを採み砕いて砂と砂鉄に分離させる。砂鉄は川底に沈澱して純度の高い真砂鉄となって残り、それは鑑の高殿の中にある熔鉱炉の凄まじい焔の

中で焼かれ、熔かされ、再び斐伊川の水に戻されると湯煙を噴いて、上質の水鋼にまで成長する。しかし、鉄と別れた砂の方はほとんど川下に押し流されてしまうのだった。そのために斐伊川の川底は年々砂を積んで高く上り、浅い川はいよいよ洪水を招きやすいという悪循環を繰返している。

雨が尋常に降って、水が穏やかに流れているときでも、斐伊川は目には見えない動きで少しずつ左から右へ廻っているというの、上流から流れる砂が、河口へ来ても水勢で軽く蹴られ、川の西岸に多く堆積されていくからである。山から流れ出す夥しい砂を喰い止める手段を持たない里人たちは、ただそれを感じとつても、首をすくめるばかりで、大蛇が動いておるげなど言うばかりであった。

川は浅いが、水は美しかった。水を汲む乙女たちは川べりに来ると藁草履を脱いで洲の上を身軽く跳び歩きながら少し深い流れを探す。そうしている間にも軟い砂にはすぐ川水が滲み出て娘たちの白い蹠を濡らすのであった。濡らされまいとして軽い足踏みをしながら水を汲むのが、この辺りの娘たちの楽しい日課になっている。

お国はしかし洲に立つて暫く動かなかつた。蹠から秋の冷気が全身に浸み透ってくるのを、お国は快く味わっていた。大柄で肉づきのいい躰の重みから、足許の砂はすぐ清水を湧き出させたが、お国は足を水に浸したまま動かない。そうして遙かな川上に、霞んで浮び重なりあっている山脈に見惚れていた。いつもは八雲たつ遠くの空も、この秋の日は青く高く晴れ上っている。

初めて古里を出て行くわけではないのに、出立の日が迫ってくると今まで見馴れていた山も川も急になつかしいものになってきている。いつまで眺めていても見飽きるということがない。山には山の想い出があり、川には川の忘れることのできない記憶があった。

「お国あねやん、何しちようか」

川べりからきて、お国の傍を駆けぬいた子供が振返って呼びかけてきた。

「お菊やんか」

お国は気がつくと、にっこりと笑った。お菊は早熟な子供であった。美しい女になるという芽生えを、すでに見せている幼女であった。お国は身近く育ったせいか、お菊も、お菊の姉のお加賀も、まるで自分の妹のように思っている。

「転れんようにせえや、水はもう冷たいけん」

お菊は返事もせずに、ひらりひらりと身軽く瀬の上を飛んで、手桶を水の中に寝かすと、ちょっと振返って笑ってみせた。六歳になるこの子供は、一人前に水汲みのできるのが誇らしいのに違いなかった。もう背中半分も掩っているお菊の黒髪を、お国はいとしげにじっと見詰めていた。できればこの子も連れて行きたい。しかし長旅について行くには、お菊はまだまだ幼なすぎた。

お菊が大人なみの大きな手桶を両手で提げて戻ってくると、お国は訊いた。

「お菊やん、なしてお前が水汲みに来た」

「お国あねやんの戻るのが遅いけん、またどっか寄門しとってかしらんぞと阿父が言って、代りに水汲んでこうと阿母が言ったけん、俺が汲みに来たがの」

「お加賀は何しちよった」

「あねやんは与吉あんやんの背負子下を織っちようよ」

「まだそぎゃんことを」

「うん。与吉あんやんと別れえのが辛いと言って、ときどき泣いちゃうだのう」

お菊がませた口調で背きながら言うものだから、お国は笑い出した。

「そうか、そうか。さあ阿母^{かつか}が待っちようけん、早こと戻れ。俺はこうからお前の阿父^{たつた}の言っちよう通り寄門^{ようかど}するけんの」

「どこへ行く」

「高いところへ登って、出雲を眺めまわして見たいんだ」

「高いとこで、どこだ」

「奉納山^{ほうのうざん}あたりだな」

「なんだ経山^{きやうざん}か」

お菊はもう川べりについて手桶をおろし、片足ずつ上げては短い着物の裾で小さな蹠を拭っている。その科^{しぐさ}が、いかにも可愛く、しかもどこかに早くも女っぽさが匂っているのを、お国は頬笑みながら見守っていた。

お菊が再び両手で手桶を持上げ、赤い顔をして一生懸命走っていくのを、お国は佇んで見送った。あの子とも暫くは、お別れだ。

水汲みをお菊が代ってしてくれたことになるので、お国は一層気が楽になってしまった。空の手桶をぶら下げたまま、川べりの草履を濡れた足のままではき、ぶらりぶらりと歩き出した。辺りのものが何もかも懐かしい。咲いている野菊を数本手折ると、お国は手桶の中へ投げこんで、それから思い直して川原へ戻り、急いで水を少量だけ掬った。そういうとき、お国の動作は急に敏捷になった。蹲^{うずくま}って水を汲むときは、お国は耳まで敏くなっている、川水が川底の砂をかする幽かな音も聴きとっていた。それは斐伊川の音であり、山から降りてきた砂が、そのかみに岩であったときの物語を囁いているように聞こえる。お国はそのとき、必ず彼女自身の阿父^{たつた}を想い出した。彼は斐伊川の最

上流で風化した岩を突き崩す鉄穴師であつた。鑛者であつた。鑛の最初の課程である鉄穴流しをしていた。鉄穴師の突き崩した御影石は、流れに揉まれ揉まれて、この杵築に流れ入るときには、美しく白い、そして細かい砂になっている。そこには斐伊川の長い長い水の旅が、一つ一つの砂粒に語りこめられているのであつた。耳を澄ますと、その秘めやかな水の音が、お国の豊かな躰の中に忍びこんでくる。するとお国は、なぜかしら躰を動かさずにはいられなくなる。斐伊川に揺ぶられるのだ、と彼女はそれをそういう工合に感じていた。

今度は腰に提げていた布巾で丁寧に蹠を拭い、草履をはき直すと、お国はまっ直ぐに顔を上げ、奉納山をめざして歩き出した。

お国の生れた翌年、つまり十五年前の天正元年に大蛇は大暴れをして出雲を荒らしまわつた。大水がひいたあとでみると出雲平野に僅かながらあつた凹凸が、すっかり景色を変えていた。たとえば奉納山はずいぶん低くなって、そのかわり昔々の洪水のとき砂に埋つた古い経寺跡が現れた。何巻もの腐蝕した経文が出たという話をお国は聞いたことがある。以来この辺りではらく奉納山を経山とも呼んでいた。お菊が奉納山と聞いて、なんだ経山かと言つたのは、あまり高いところではなくてお菊の興味を惹かなかつたからであらう。

だが奉納山から望めば出雲平野が目の下に展がって、かなりの見通しがきくはずであつた。秋空を切り裂くように百舌が鳴き、黄金色に波うっている田に響く。すると今の先お国の躰に入つた水の音が忽ち鳥の声に應じて、お国の足どりは踊るように軽くなった。音というものが、お国は何より好きだ。音が聞けると、躰がじつとしていられなくなる。それが昂じてくると、何をしていいのかわらなくなつて、ただもうむやみに走り出し、疲れて息が止まりそうになるまで駆け続けるのだった。お

菊の阿父^{たつた}が、大方道草を喰っているのだらうと言ったというのは、そういう工合になったお国が時の経つのを忘れてしまうことが、これまでにも屢々^{しばしば}あったからである。

十五年前に現れ出た経寺跡は間もなく草が生い繁って、もう何も見えなかった。水が冷えていたように、秋が始まっていて、色づいた蔦の葉が、黒松^{くろまつ}の幹に赤くからみついていた。その下は山萩^{やまはぎ}の盛りで、紅紫の花は勢がよかった。砂と岩の急な坂道を、お国も勢よく登りながら、途中で幾度か休んでは山萩を手折り、野菊の挿してある手桶に投げこんだ。頂上に着いたときには、だから萩の花が溢れて小さな菊は見えなくなっていた。

まず息をついて、手桶を下におろしたとき、背後にざわざわと萩を掻き分ける音がしたと思うと、

「お国よ」

若い男が顔を出した。

「あれ、九蔵ではないか。なして俺がここに居^おうことが分ったや」

「お前の家へ行きたら、お菊がここへ行つたと教えてごいたけん、追いちやけて来た」

「そうかえ。ええとこへ来たがの。見てまつしゃい、萩の花がこげん咲いちよう。それに、それ」

お国はすぐ目の前に展がる田園と山を指さしてみせた。

「こうして見ると斐伊川は見事な川だかのう。大水が出るの、大蛇^{おろち}じゃのと言うが、そんなことは毛ほども見せずに、静かに流れちようかの」

九蔵は黙って、若者には似合わない疑い深げな目をしてお国を見ていたが、お国の華やかに喋る様子が眩しいのか、言われるままにお国の指し示す大川の流れを見渡した。それは広い、大きい、白い洲の多い川であった。しかし河口と違って中村^{なかむら}から向うに見える斐伊川は次第に細まって南から東に

折れ、少し南に折れ戻ってはまた東へと迂回していく。

「もうじき旅に出えかと思うと、急に懐しいもんが殖えて、どげしようもない」

しばらくしてお国は振返り、九蔵の存在に気がついたのか、きまり悪げに言った。

「どげしても出て行くかや」

「なしておかしげなことを言うか。そげなことは既から決ちよったのに」

「儂の嫁になるつうことは、もつと前から決ちよったぞ」

「それはそれでも三右衛門さんが出かけることに決めらいて、お前もええてて言つたでないか」

「儂がええてて言つても、お国は行かんもんと思つておつたがの」

「なしてだえ。俺は三右衛門の養兒で、お加賀が行くなら、どうしても俺も行かねばならんけんの。俺の阿父も阿母も、俺の生れた翌る年に死んだけん、俺が三右衛門の婆に育てらえたのは九蔵も知つちようがの」

「お国はきつと戻つてくうか」

「おかしげなことばかり訊くな。この前のときも、出かけてすぐ戻つたでないかえ」

「あんときはお国は、ほんの子供だったし、都に戦が起つたけんおられなくなつたんだろがの。儂は今度は心安らかでいられんのだわ」

「お加賀も行くんだぞ、九蔵。お加賀も与吉の嫁になることが決ちようだが、出て行くんだ。与吉もお前と同じように待ちようことになつちようが、何も心配していいない」

「儂も、お加賀なら心配はしねえ。お加賀なら、きつと戻つて来る。だけんの、お国、お前は行くこと決つてから、まるで人間が違つてしまつちようけんの」

「そぎゃんことはなかる」

「自分で気がついておらんのだ。儂には分っちゃう。お前の頭ん中はもう出て行くことで一杯だけん。踊ることで一杯だけん。儂のことは片ちよんぱも思っちゃらんけん」

九蔵のねつっこい調子が、お国には少々わずら患わしくなつて来ていた。暫くでも別れていることの辛さが、九蔵を常ならない様子にさせ、不安にさせているのだと分つていても、いつまで相手をしている気には、やはりなれなかった。お国は声を励まし、もう一度川上を指差して、話を変えた。

「そげんことはないぞえ。俺は出て行く日が迫つて、この生れた国が何もかも懐なしてならん。俺がこの山に登つて来たのは、斐伊川を見ようと思つたからだ。それ、あの川上のずつとずつと先の山奥が、俺の阿父あつたと阿母あつかの生れたとこだ。どげなとこか、一度は行つてみたいもんだ」

「お国の阿母は、鑑たたらの村下むらげの娘だったげな」

「そうだ。村下の娘と鉄穴師かなじでは釣合おかけわぬと言われて、二人で逃げて山を降りた。薄すすきの繁しげみにかくれて、幾日も斐伊川の水ばっかり飲み飲みしながら川に沿うて降つて、この中村へ落着いたげな。きつと今時分のことであつたらう」

鑑たたらの村下むらげというのは、高殿の中の熔鋳炉に砂鉄を篩ふる入れる役目を持ち、いわば熔鋳炉の主任格で高殿の中で働く者どもの中でただ一人代々世襲で受継がれている。いわば鑑者たたらもんの中では身分柄がよく、露天で労働する鉄穴師かなじとは娘が縁組むことなどできなかったのである。鉄を熔かす火を司つかさどる男は、鉄よりも頑かたくなであつたのかもしれない。村下はすぐ配下の者に命じて娘を連れ戻そうとした。鑑たたらは山間に何万と集つて居住している大集団である。命じられた者どもは八方に散つて探したが、山は深く、川は八筋に岐れていて、川上から氾濫しんぷしに探しても下流の杵築中村きづきなかつらに至るまでには一年が過ぎていた。

斐伊川は流呈二十三里（八八キロ）だが、支流も多ければ山間には他の鑛も居住し、この辺りでの搜索にはかなりの手間がかかったからである。それと、おそらくは鑛者の中にも二人に同情している者が多かったのだろう。中村の三右衛門の家で世話になっていた二人は、既に一人の娘をもうけていて、勿論帰ることを肯じなかった。三右衛門けのお婆が強く味方して、産後の疲れを理由に村下の娘を動かすまいとし、鉄穴師の若者もまた命がけて妻を守ろうとした。連れ戻しに来た者との間で押し問答が繰返されているとき、あの天正元年の大洪水が起ったのだ。

「怒った鑛が大蛇を使って、俺の阿父と阿母を押流したてて言う人もああげなが、お婆が言っちゃったのでは、そげではないだと。出雲の里の者は水の出るのに馴れちようけん逃げ方が上手だと。鑛者の阿父と阿母は逃げようを知らんだったけん、そうに夏の最中で阿母は躰が弱っていたけん、それをかばううちに阿父も一緒に大蛇に吞まれてしまったんだ」

「あんときは人死が多かったげなが」

「お婆が言っていた。川上から砂が流れてくるけん、斐伊川の川下はほとんど底が上る。だけん、始終この里には水が出て、百姓たちは貧しく貧しくなっていくだと。鑛がその気になって砂を止めによ、里はいつまでも倅せにはなれんと」

「その通りだ。里の者にはどけすることもできねえ」

「俺には鑛者の血が流れちようだぞ、九蔵」

お国の顔はこのとき、九蔵が息を吞むほど輝いてみえた。

「お婆が、よう言っちゃったぞ。斐伊川というのは火の川のことだ。川上では鑛が火を噴き上げて粉鉄を煮ている。それで火川と言うげな。俺の阿母は村下の娘だから、きつと鉄穴師の心を灼いて熔か

しただろう。その血は俺にも流れてるとお婆はいつも言つて大事に大人おせにしてくれた」

お国は物心ついてから、その物語を何よりも好んだ。自分からせがんでお婆に繰返し繰返し同じ話をしてもらつた。火の母が、鉄穴師かなじの心を熔といたという、これ以上に素晴らしい話があるうかと、その都度心がときめくばかりでなく軀おのを戦かせて聴いた。

そのお婆も三年前に死んでゐた。だからここ三年、お国はこの物語を聴く折がなかったのだ。いまこの奉納山の上で、斐伊川を見下しながら、一人の聴き手の前で、お国は初めて自分でそれを物語り、そして自分で酔つてゐた。火の母、鉄の父、この物語はあまりに力強く、あまりに美しく、その娘は感動で息を詰め、やがて酔い痴れた。その感動が、傍らの若い男にどう伝わつていったかを考えなかつた。

九蔵の手が肩にかかつたとき、だからお国は吃驚して、声をあげ、一間も飛び退しきつた。一瞬、恐怖がつつのり、しかし九蔵と距離が出来たので安心して喋り出した。

「お婆がの、お国の身の内には火が燃えちようけん気をつけろと言つてゐた。傍に寄ると危いぞ」
声がうわづつてゐるのには気がついてゐない。九蔵の方が、落着き払つてゐた。

「いや、お国の身の内には、まだ火は燃えちよらん。儂が今から火をつけえわなん」

「何を言うか、九蔵。俺はきつと戻つてくる。それまで待て。与吉も待ちようだぞ」

「与吉は待てても、儂は待たん。与吉はお加賀に安心しておつても、儂はお国に安心しておらんけん。お国、こいて」

「いやだ、俺はそげに傾かぶいたことは大嫌いだ。お婆が、傾かぶくなやと言つて俺を大人おせにしてくれた。俺は鑪たちの村下の血筋だ。阿母おちちのように大蛇おろちに吞まれとうない。婚礼までは、潔きよい身でいたい。大社さん

にお札を貰うてから嫁になりたい」

お国の声は常になく高く、抗えば抗うほど九蔵の心を掻き立てることを知らなかった。逃げようと
して、繁る山萩の茎に足をとられた。はね起きようとしたところを、九蔵が息を荒らげて羽搔いじめ
にした。

「九蔵、三右衛門さんに知られたらどげするつもりだ」

「なに、三右衛門さんは男だ。女と別れるときの男の気持は分つちよられる。何も心配することはな
い」

「それでも、俺は、いやだ。こげな傾いたことは、いやだ。離してまっしやい」

「帰って儂の婢になるに、なんが傾いたことだ。女夫になれば、当り前のことだぞ」

「今は女夫になる前ではないか。これは、やっぱり、傾いたことだぞ」

腕の中で腕くお国を、九蔵はいよいよ強く抱きしめ、傾くのはいやだいやだと口走るお国の口に唇
を当てて塞いだ。

九蔵の手が衿から中へ入って乳房を掴むと、合わせていた唇から荒い息が洩れた。それは九蔵のも
のか、お国のものなのか、分らなかつた。紅紫の山萩の花を揺らせて、二人は繁みの中に倒れ、お国
は抗い続け、九蔵はそれを身悶えと覚えて、強く抱き、激しく愛した。小さな痛みが、お国の躰を走
りぬけた。

九蔵が躰を離れたとき、お国も黙って身を起した。心の中で、こういうことだったのか、男と女の
ことというのは、こんなものだったのかと、懶く思っていた。最初の驚きは忘れていて、いまさきの
痛みと、濡れている躰だけが残っている。喜びも感動も、少しもなくて、こんなことのために、阿父

と阿母は駈け落ちしたのかと不可解わからなくなっていた。

俺の身の内には火がないのだろうか。九蔵が火を点けると言っていたが、いったい何が燃えたというのだろうか。これが女夫になるということなのだったら、女夫めおとというのは、なんという詰らない味気ない暮しなのだろう。お婆は火がつかぬように、火に呼ばれて身内の焰が燃えさからぬように、娘のときには藍染の布子ぬのこを着れと言っていたが、それは村下むらげも火の粉を防ぐために着るものだと言わされていたが、火が向うから飛んで入ったのに、俺の躰は燃えていない。それは何故だ。あれは嘘だったのか、と、お国は考えこみながら、やがて山萩の根元に落ちていた紐を取上げて、藍木綿の前をあわせ、しめ直した。

九蔵が黙って、お国の背についた枯葉や山砂を払っている。

「えなげなことを言って、すまんだったの。待っちゃうけん、躰をいどうて行つてこいや」

それは安心した男の声であった。お国は、曖昧に背いてみせた。

「去なや。暮れてきたけん」

九蔵が背を向けて歩き出した。お国も後に続こうとして、ふと見渡すと、里は夕闇に溶けていて、斐伊川が銀しろがねのように輝いているのが見えた。陽光の下で見るのとは一変して、本当に人が大蛇おろちと呼ぶように怖ろしい生きものに見えた。しかしそれは同時にこの上もなく美しかった。お国の目は改めて遠くやまあいの山隙から細く現れて次第に胸を肥らせ、目の下に来て大きくひろがりながら海へ注ぎこむ白い流れを見詰めた。そして海は、日没後の海は水明りが白砂との境界を描いて、美しい海岸線を示していた。お国は放心して彼女の両親が死んだ海を見た。

「なんしてる、お国。早く来んか」